

Ⅱ 世界史の学習内容における他教科との関連性

——社会科の教科構造を考える一つの視点として——

都 築 亨

<要旨>

3～4単位の世界史の内容を考えると、どのような点からおさえたらよいか。内容の精選、くみかえを考えねばならないが、一つの視点として、他教科(科目)との関連において内容をおさえゆきたいと考えている。

1. ね ら い

一昨年以来、指導要領の改訂にそなえて、本校でも3～4単位の世界史をどのように構成すべきか、いろいろ構按してきたのであるが、前年度紀要で報告したような、範例学習の導入によって、一般的な歴史の流れを削除する側にまわすのは、こと「歴史」の学習に関する限り、あまり気のきいた方法ではないと思われる。

範例的方法の導入はなお検討すべき問題にはちがいないが、今一つ内容の精選・削減をはかる視点として地理、日本史、あるいは古典等の教材内容、構成を検討し、それらとの関連性のもとに内容の譲るべきは彼に譲り、或は併行して学習をすすめる中で、範例学習の際に意図した学習の深化、定着化をはかる方策を考えることも必要であろう。

周知のように、新指導要領で、文化圏学習が提起されているが、特に文化圏の形成、交流、発展という形で世界史をみると、地理的背景の重要性が強く意識される。又東アジアとくに中国の文化の理解については「史記」などを通して、漢文の教材内容との接合点を念頭におくべきであろう。

日本史、倫社等の内容についても同じく関連を検討すべきだと思うが、とりあえず本年は、地理、漢文に限って世界史との関連性を検討し、世界史の学習にその条件を付加してきた。

2. 地理Bとの関連性

<文化圏の形成>として古代を、<東西文化圏のひろがりや交流>として中世を学習するとき、それぞれの文化圏についての地理的条件、背景を強くとり上げるべきであろう。新指導要領に拠る教科書で、各文化圏について「○○世界の風土」の節をおいているのは

1社であるが、そのような構成はとらなくても以前よりは、地理的条件について記述を加えていることはたしかである。(その辺りを紙数の関係で紹介できないのは残念であるが)世界史の構成と内容を考えると地域という視点を無視することはできないし、今迄の世界史がこの辺りを「世界史地図」だけに委ねて、ひたすら「流れ」のみを追求してきた感があったのに対して一つの進歩とみることはできる。

問題は、その地理的条件を今迄の内容に付加した形でとり入れるとすれば、尚更に内容の増大を招くのみで「精選」とほど遠い方向にゆくことになる。一方でこの視点を入れながら、他方で「流れ」の記述をカットせざるを得ない。世界史の中で「地理」との関連性を考える視点は次の3点ではないかと考えている。

(1) 世界史の舞台としての各文化圏

上にのべたような意味において、各文化圏の特質を、地理的、民族的、宗教的、社会構成的要因を主としてまとめる。

(2) 周辺諸地域の歴史記述

今迄の「世界史」の中で特に軽視された感のある周辺諸地域ないし発展途上国の歴史をどのように扱うべきか。60年代のアジア、アフリカの新しい動きの進行する中で「中国、ヨーロッパだけでない新しい世界史」を構想する視点が提案されてきたと思うのであるが、中国、西欧を半分に減らしてA・A諸国の歴史記述を最大限あらい上げてみた所で現代世界の史的発展を最も適確に浮彫りすることにはなり得ない。

前3世紀より4世紀ごろにいたる北方遊牧民族の動きは、中国史の付帯部分として冒頓単于の匈奴程度をあげるのではなく「内陸アジア世界」としてまとめる方が望ましいし、6世紀以降の東南アジアの動きは独立させるよりは、そのころの東アジア文明圏の形成過程の一環として眺観すべきであろう。その位置づけはともかくとして各時代を通じて常に東南アジアや中央アジア、東ヨーロッパに独特の文化を持続した民族の動きがあったことは忘れてならないであろう。

そして特殊の地域の歴史は「世界史」として通観するよりも「地理」の中で「ヴェトナム」「インド」を学習するとき、その歴史的背景の中においてとらえる方が有効ではないかという観点から(加藤佳孝地理B

における歴史教材のとらえ方参照)むしろ、1年の地理Bで世界史的教材内容を吸収、学習させることを考えてみた。歴史的内容は「世界史」、地理的内容は「地理」のみで分断学習させるのではなく、何れも他とのからみあいの中で学習できてこそ、よりたしかなものに近づき得るだろうし、とくに発展途上国——今まで世界史の中で周辺諸地域と見做されてきた地域がなぜその発展がおくれてきたか、という世界史の命題の解明は、世界史という枠の中でよりも、個別の地域の問題として、その歴史的背景の学習を拡大・充実させた方が、はっきりする問題であろう。

(3) 東西交渉の視点

かって「世界史」が高校教育の舞台に新しく登場した時、その内容は西洋史と東洋史の混合体であり、その比重とか、組み合わせとかのみが内容構成の問題とされてきた。いずれの構成も本当の意味で「世界史」の名に値しなかった。

現実に世界史が成立するのが産業革命（資本制生産社会の成立）以後であったにしても、それ以前に東洋・イスラム・西洋の各地域がいかにかわりを持ち、文化的・社会的交流をもってきたか。その交流の乏しかった古代に関しては文化圏学習で割切るにしても、中世以後の交流・交渉の態様をただ時間の目で追うのみではなく、空間、地域という視点でおさえるのが大切なことではないかと今思いかけてきている。

シルク・ロードとか中近東が学界、ジャーナリズムで問題にされかけているという一般的情勢の中で、かって常に東西世界に交流があったことを意識しつつ世界史を学習させ、そこから文明の問題、民族の問題、歴史の発展させる力が何かという問題を追求してゆかねばならないだろう。そうでなくて18世紀以降に始めて世界史が成立したとすると、それはヨーロッパ資本制生産社会が、いかにアジア、アフリカを植民地・市場にしてきたかというヨーロッパ偏向世界史から一歩も出ることは出来ないであろう。

3. 漢文（古典）との関連を意識した世界史の教材編制

世界史の学習内容の中で、中国史はともすれば事項羅列的になり、生徒の興味をそぐような結果となりかねない。古典の担当教官の方からも、漢文の教材について歴史的背景の理解が乏しいと学習効果が薄いとの話があったので、両方の学習進度をあわせて、高2

の2学期当初に計画的に実施してみた。3クラス中、2クラスは古典を先習する形をとり、1クラスは世界史を先習する結果となったが、ほぼ同時に

世界史の学習内容	漢文の教材内容
春秋戦国時代の社会と思想 諸子百家	史記 予讓 蘇秦・張儀（戦国策）
秦漢帝国の成立、始皇帝の統一 劉邦による漢統一	司馬遷（略伝・その思想） 項羽と劉邦（史記）
武帝の時代、内政と外征	鴻門の会・四面楚歌

の学習を併行させた。結果を数字で示すことはできないが、生徒の感想ノートでみる限りかなり成功であったとみてよいし、史記の内容を世界史の時間に詳しく扱うとすれば更に2、3時間を要したことであろうと思われる。（資料省略）

4. 生徒から見た他教科との関連

A 世界史が他の教科・科目の学習に役立つ場合は B 他の教科で世界史の参考になる場合

	2年	3年	計	2年	3年	計
日本史	52	58	110	17	27	34
地理	19	5	24	19	10	29
倫社・政経	11	22	33	2	28	30
古典(漢文)	23	9	32	83	30	113
美術	22	16	38	17	13	30
その他	17	13	30	1	4	5

2年で世界史の学習に役立つものとして古典(漢文)をあげている数が特に多いのは述上の理由による。学習の主体は生徒であり、生徒が理解認識し易いように学習条件が整えられ、教科なり教科構造なりが考えられなければならないのに、教科という明治以来の伝統的城砦に依拠して生徒を呪縛し、教科の恣意的要求によって学習内容が一方向的に授与されてきたのが今迄の中等教育の態様であった。生徒の主体性を尊重する学習とは教科書を無視して勝手に没指導のグループ学習をやらせることなくして、各学年の学習目標に関連する学習素材を各パートから（それが教科であってもかまわないが、そうでなくてもよいであろう）提供し、それを組織関連づけて教科の論理を超える視点から生徒本位の教育課程が用意されてはじめて可能になるものではないだろうか。

ただ地理とか、古典とかの他教科との関連ある部分を検討するだけでなく、そうした視点に立ってひろく高校教育の在り方を考えたいと思っている。